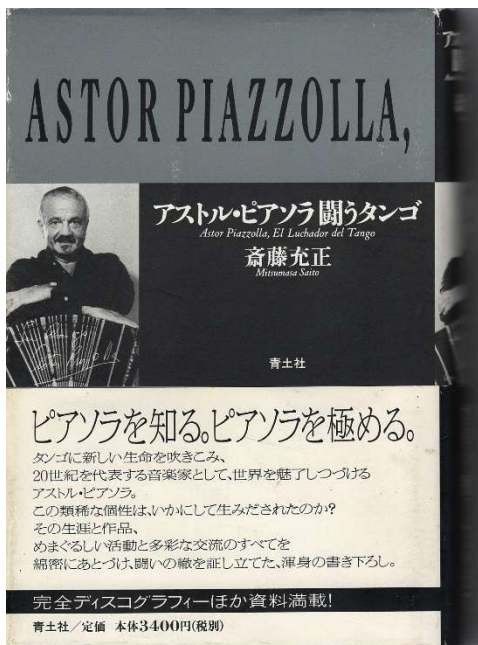


斎藤充正『アストル・ピアソラ 闘うタンゴ』青土社、1998年：ピアソラの魅力



1. バンドネオンという楽器ータンゴとクラシックの出会い

アルゼンチン・タンゴに使われるバンドネオンという楽器は、20世紀の前半にドイツで大量に生産されて世界に輸出されましたが、第二次大戦後には製作されていません。バンドネオンは、アコーディオンの一種といえるものです。アコーディオンとの違いは、音楽の理論を知らず、またピアノやオルガンの経験のない庶民でも演奏ができるように工夫された楽器です。つまり鍵盤の代わりに手の形に合わせてボタンがあり、これを押すことによって和音が出るものです。鍵盤楽器になれた人からいえば難しいのですが、指の配置だけで和音を出せるため教養のない人が小さな教会で賛美歌の伴奏用に利用

するには適したものでした。

田舎の教会用の楽器がアルゼンチンに輸出されると、この楽器が当地のタンゴの発祥に深くかかわってくるのです。タンゴは、1900年ごろに最初は売春宿から生まれました。小さいとはいえドイツの神聖な教会から、アルゼンチンの売春宿に場所を変えて活躍し始めたのです。その後タンゴは洗練され、ダンス音楽として発展します。その際に、バンドネオンは欠かせない楽器となりました。次ページの絵葉書は、ピアソラがバンドネオンを演奏する場面です (British Portrait Gallery で米山が購入し所蔵)。

ピアソラは、タンゴの革新者(破壊者)として、伝統的な一部のタンゴファンからは毛嫌いされますが、自分の音楽を貫いた作曲家です。ニューヨークに移民として生まれたピアソラは、若いうちにアルゼンチンにわたり伝統的なタンゴバンドでバンドネオン奏者として生計を立てます。しかし、伝統的なタンゴに飽き足りなくなり、パリに留学して、有名なナディア・ブーランジェという音楽教師からクラシックの作曲を学びます。ナディアは、ピアソラの才能を見抜き、クラシックを模倣するより、自分自身の音楽をやりなさいと、ピアソラに言います。ピアソラは、その後アルゼンチンに帰って、クラシックでもない、伝統的なタンゴでもない、まさに自分の音楽を書き続けます。

ピアソラは、1991年に亡くなりましたが、その後、ピアソラの音楽がタンゴファンだけでなく、クラシックやジャズファンにも広く感動を引き起こしました。またCMなどにも利用されたりしましたので、皆さんの耳にもピアソラの音楽の断片が残っていることでし

よう。日本では、斎藤充正『アストル・ピアソラ 闘うタンゴ』により、ピアソラの音楽が詳細に紹介され、ピアソラブームを盛り上げました。ピアソラファンには必携の書物です。

第二回は、ピアソラの代表作である「タンゴの歴史」、「アディオス・ノニーノ」「リベルタンゴ」など親しみやすい曲を聴くほか、少し珍しい彼のピアノ作品なども聴いていただきたいと思います。

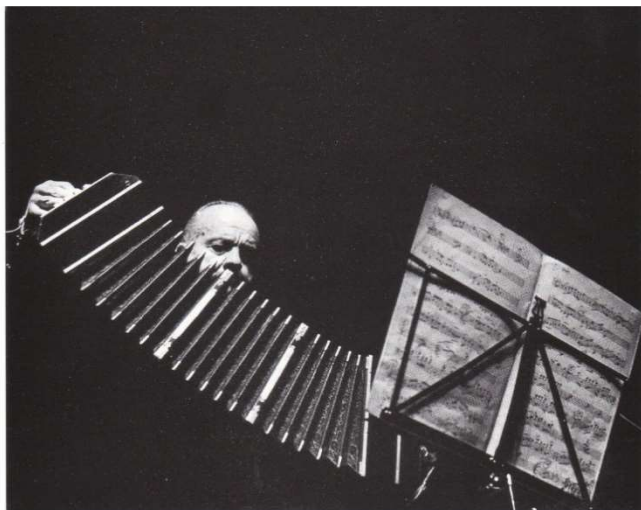
2. 演奏予定曲目

ピアソラ「タンゴの歴史」より

ピアソラ「ワルツ」三つのピアノ小品から

ピアソラ「リベルタンゴ」

ピアソラ「アディオス・ノニーノ」



バンドネオンを演奏するアストル・ピアソラ
(ロンドン肖像画美術館で購入した絵葉書)